

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 文化資源論講座 無形文化資源論分野
廖 莉平

【論文題目】 「陶晶孫研究——九州時代を中心に——」

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

廖莉平氏の論文「陶晶孫研究——九州時代を中心に——」が取り上げる陶晶孫は、十歳で家族とともに来日して以来、二十年余を日本で過ごした経歴を有する文学者であり疫学研究者である。本論文では、中国現代文学に大きな影響を与えた文学結社・創造社の草創期の有力メンバーの一人でありながら、日中戦争中の行動が災いして戦後は「漢奸」扱いを受け、そのため中国の文学史から姿を消していた文学者・陶晶孫を取り上げ、中国現代文学史上に陶晶孫をどう位置づけるべきかを論じたものである。

廖氏は、陶晶孫が創作を開始した九州帝国大学在学時代に焦点を置き、九州時代に書かれた陶晶孫の作品の特質を作品に沿って丹念に分析することから作業を開始している。

第一章では、陶晶孫の処女作「木犀」と第二作目の小説「洋娃娃」について、「木犀」が当初日本語で執筆された際の題名（フランス語）が、日本語に翻訳すれば「運命を信ずる」であったことを手がかりに、両作品の共通点を一つ一つ解きほぐし、「洋娃娃」が「運命」という言葉をキーワードとして「木犀」の延長線上に創られた作品であることを初めて明晰に論じている。

第二章では、陶晶孫最初の戯曲「黒衣人」について、これまで見落とされてきた登場人物「弟」と主役である「兄」との関係に着目する。先行研究が、死を賛美する耽美主義的な作品として「黒衣人」を位置づけてきたのに対し廖氏は異を唱え、「黒衣人」は大人になることを拒否したいと感じていた当時の陶晶孫の思いを反映した作品であると論じるとともに、メーテルリンクの「闖入者」からの影響についても言及している。

第三章「陶晶孫と精神医学」では、少年二人のほのかな愛情を軸に展開する「剪春蘿」について取り上げ、当時医学生だった陶晶孫は、フロイトの精神医学の影響を受けて創作をおこなったのではないかと推測している。

第四章は、「兄」と「妹」の恋愛に、「妹」と少女の恋愛を絡めて展開する戯曲「尼庵」を取り上げ、当時日本国内で話題となっていた厨川白村の『近代の恋愛観』を下敷きにして書かれたのが本作品であるという従来からの見方に真っ向から反駁し、むしろ厨川の恋愛論を批判することにこそ、陶晶孫の意図があったのだと論じている。

第五章では、これまでの議論を踏まえたうえで、九州時代の作品とその後の作品とを、「放浪」という用語の使われた方の相違に着眼して論じている。氏によれば、九州時代の「放浪」が同時代の日本人知識人と同質の現実逃避的な「さすらい」志向の表現であったのに対して、九州を離れて日本社会で働きながら創作していた時期の「放浪」は、日本と中国の狭間に身を置き、自らのアイデンティティを求めて「さまよう」作者の姿を反映していると論じている。以上の考察を基に、廖氏は、陶晶孫の文学者としての貢献は、単にモダニズム文学や日本の新感覚派の紹介者であったことにとどまるものではなく、グローバル時代を生きる現代人がまさに直面している問題を先取りして表現していたことにあると結論づけている。

日本語の行文にぎこちなさや回りくどさがまま見られるものの、先行研究への目配りも充分おこなった上で手堅く丹念な論証をおこなっており、学位論文としての完成度は高いと判定できる。

【最終試験の結果の要旨】

審査委員会は、平成22年1月15日(金)午前11時から12時まで、文法棟小会議室において、廖莉平氏に対する口述試験を実施した。まず、論文の基本的な構想と執筆意図、論文の意義や独創性、論文全体の概略などについて当人から説明があり、ついで審査委員から論文の内容についての質問等がおこなわれ、それに対して、廖氏は一つ一つの確に答えを返した。

さらに、平成22年1月23日(土)、文法棟A-2教室で開催された学位論文公開発表会において、廖氏は自らの学位論文について発表したのち、出席者と質疑応答をおこない、専門領域について優れた学識を有していることを示した。

以上のことから、本審査委員会は、廖莉平氏は自らが専門とする研究領域について、豊かな学識を有し自立して研究を行う能力が十分にあると判断し、博士(文学)の学位を授与するに値すると判定した。

【審査委員会】

主査 吉川 榮一

委員 森 正人

委員 坂元 昌樹

委員 福澤 清

委員 屋敷 信晴